

『風は南から』

令和5年度 校長室便り
(12月22日)(第20号)



「当たり前」に感謝

先日本を読んでいましたら、吉野弘さんの「虹の足」という詩が出ていて、私が担任したある生徒のスピーチを思い出しました。紹介します。

『皆さんは、日常における「当たり前」について、どれほど感謝できているでしょうか。感謝していると自分で思っているにも、実際にはかなり多くの「当たり前」に対して感謝の気持ちを忘れてしまっていると思います。特に、勉強や部活動などで、辛ければ辛い時期ほど、よりもっと特別なことを求めようとしがちです。例えば、家に帰り夕食を食べ、寝るといったごく日常の行為の中には、実は我々本人にとっては、決して意識することのない、家族の支えがあると思います。単に家に帰るといっても、自分たちが将来一人暮らしをすることを考えれば、いつも温かく帰りを迎えてくれる家に帰ることができるということは、とても恵まれていると思います。僕が「当たり前」に対する感謝の気持ちを強くするようになったきっかけは、中学3年の時の国語の時間で学習した「虹の足」という詩です。内容は、ある人が虹の中にいる時、虹の外から見ると、その人が虹の中にあることに気づくことができるが、当の本人は自分が虹の内部にいることに気づくことができないということから、他人には見えても、当の本人には気づくことができない幸せがあるということに感銘を受けました。この虹の話のように、他人からは見えて、自分には決して気づかないような幸せというのは、身の回りにたくさんあると思います。辛い時こそ、より身近な当たり前のことを見直し、誰が支えてくれているのか、誰のおかげでその当たり前が成り立っているのか、深く考えると、実は当たり前のことが、一番幸せであると感じることができると思います。』

2年生の時に担任しましたが、彼は「僕で良ければ」と委員長に立候補し、持ち前の明るさでクラスを楽しくまとめてくれました。今は医師として活躍していると思います。

今年のうちに、自分の「当たり前」とは何かについて考えてみるのもいいかもしれません。良い年を迎えてください。

**幸せとは何かと問われれば、まさに変わらぬ日々こそ
幸せだという答えにたどり着くものです。**

柗野俊明「幸せはなるものではなく感じるもの」より

12月12日 第4回 グローバルクラスルーム (1-2)



4回目で最後となる台湾とのオンライン授業授業が、12日(火)1年2組の授業で行われました。オンラインでつながるまでは緊張している様子でしたが、今回は始まるとすぐに打ち解けているようでした。お互いに自己紹介を済ませ、用意していた質問が終わり、ジェスチャーゲームをする頃には大変盛り上がっていました。各グループについてサポートして下さるWith the Worldの職員の方の手助けもあり、あっという間に50分が過ぎて、最後はみんな写真撮影をして、名残惜しそうに終了しました。英語科の先生方の御協力、海外に行かずに1年生全員が国際交流という貴重な経験ができました。

12月19日 「復帰の歌」歌碑建立式典



今年が奄美群島復帰70周年の節目を迎えるにあたり、当時復帰運動の象徴とされ、今日まで語り継がれてきた「復帰の歌」の歌碑が、本校の中庭に建立されました。

元沖高の教員だった西村富明さんの提案から、昨年度両町合同の実行委員会が発足し、今年の4月から協議を重ねてきて、建立が実現したことになります。

12月19日15時より除幕式が行われ、作曲された柴先生のご家族にも参加していただきました。そして、15時40分より当時高校生で復帰運動に参加された田中和夫さんと竿田富夫さんの講演会が開かれました。



田中さんは、高校2年の時に沖永良部島と与論島だけが切り離されて奄美群島が日本に復帰するという二島分離報道が流れ、母親から子どもが売って飛ばされたような思いだったと振り返りました。それから生徒会が中心となり、トラックに乗ってこの屈辱の思いと母国復帰の願いを全島に訴えて回ったそうです。当時国語科の教員だった佐伯先生が、復帰の歌の歌詞を作り、最初は当時の流行歌だった「異国の丘」に合わせて歌っていたそうですが、曲を書いてほしいという生徒の訴えに応じて、音楽の柴先生が即興で曲を作ってくださいました。この70年の歴史を振り返り、田中さんは、「高校生の力は大きい。復帰運動の主軸が沖高生だったように、皆さんにはこれからの島の未来を考え、島おこしの主軸になってほしい」と訴えました。



竿田さんは、「復帰の歌」ができるまでの経緯を話してくださいました。2年生の10月1日の生徒総会で二島が離されて奄美群島が日本に復帰することを知られ、最初は、生徒はみんな息をのみ、そして「なぜ二島だけ切り離されるのか」という怒りに変わっていったと言います。その思いが復帰の歌の最初のフレーズ「何で帰さぬ永良部と与論」が生まれることになったようです。そして、自分たちに何ができるのかという思いが、3番の「返す返さぬ熱次第」という歌詞につながり、この歌が自分たちに勇気と情熱を与えてくれたと話されました。最後に、「高校生が立ち上がると地域



が応援してくれる。中庭の歌碑を見て何か感じてほしい。勇気と希望を持って前に突き進んでほしい。復帰運動は復帰の歌そのものだった」と語ってくださいました。

最後に、参加者全員が、沖高の音楽選択者と共に「復帰の歌」を声高らかに歌い上げ、この歴史を決して忘れず次の世代に語り継ぐことを心に誓いました。

**先人が 僕らのために くれた歌
未来に贈ろう 復帰の歌を**

北原 優聖 (2-2)